こう述べると、読者から、疑問の声が挙がるかもしれない。

「国家リーダーであれば、歴史や思想を語ることは、当然ではないか？」

「温家宝も、それを行ったにすぎないのではないか？」

たしかに、日本の政治家にも、歴史を語り、思想を語る人物は、いる。

しかし、**国家リーダーが歴史や思想を語るとき、自戒すべきことがある。**

**言葉には、重さがある。**

そのことである。

すなわち、**「言葉」というものには、それぞれ「重さ」というものがあり、その言葉を堂々と語り、聴衆の心に投げ込むためには、相応の「体力」が求められる**のである。

ここで言う「体力」とは、端的に言えば、**「人物の重量感」**のこと。

例えば、「砲丸投げ」という競技において、体が軽く、体力の無い選手が、重い砲丸を投げようとしても、遠くに飛ばせないばかりか、自身が砲丸の重さに押しつぶされ、腰が砕けてしまう。

あたかも、この「砲丸投げ」のように、**「重い言葉」を、腹の据わっていない「重量感」の無い人物が無理に語ると、聴衆の心にその言葉が届かないばかりか、語った本人が、その言葉の重さに潰されてしまう。**

例えば、**「愛」という言葉。**

この言葉は、誰もが知っている言葉であり、誰もが容易に使える言葉である。

しかし、実は、この言葉は、本来、「極めて重い言葉」である。

使い方を誤ると、それを語った人物の「軽さ」が、逆に浮き上がってしまう。

## ダライ・ラマの「言葉の力」

それは、**「慈悲」という言葉**も、しかり。

例えば、ダライ・ラマ一四世が、世界中での法話や講演において、この「慈悲」という言葉を語る。「Compassion」という言葉を語る。

そして、それが、会場に集まる数千人の人々の心に、深く入っていく。

その言葉が浮いてしまうことは、決してない。

なぜか？

その背後に、想像を超えた厳しい修行があるからだ。

その修行を通じて身につけた「重量」があるからだ。

ダライ・ラマの、あのにこやかな笑顔を見ているだけでは決して分からないだろうが、彼は、若き日から今日にいたるまで、チベット密教の厳しい修行を積み重ねてきている。

そして、彼に与えられた「亡命」という過酷な人生。

それが、彼の「慈悲」という言葉に、「重量」と「力」を与えている。

二〇〇九年一一月、来日したダライ・ラマと四人の識者の「対話」の場に、その識者の一人として招かれた。

数千人の聴衆の前で対話を行い、最後に、壇上で、にこやかに笑うダライ・ラマと手を取り合い、挨拶をした。

そのとき、ダライ・ラマの全身から伝わってきたのは、言葉を超えたもの。

深い「愛念」であった。

そのときの不思議な感覚が、いまも心に残っている。